ネギ畑からクジラの化石

加　藤　久　佳

それは、平成24年4月、市民研究員の石井明夫さんからの「柏のネギ畑の脇に、クジラの脊椎骨の化石が転がっている。」というメールで始まりました。石井さんは研究テーマの一つとして、柏周辺に分布する約 12～13 万年前の木下層の化石を調べていました。現地確認に訪れてみると、直径23cmほどの数個の脊椎骨の化石が、トラクターで畑を耕す時に引っかかったとのことで、掘り出されて土留めに使われていました。

その後の石井さんからの連絡は、さらに私を興奮させるものでした。「地主さんの許可を得て、収穫の終わったネギ畑を試掘してみたら、クジラの肋骨らしき骨が見つかって、周りからサメの歯がたくさん出てきます！」

すぐさま地学系職員とボランティアで、ネギ畑の発掘を始めました。次々に見つかるサメの歯に導かれるように掘り進めていくと、ついに巨大なザトウクジラの頭骨や脊椎骨が見つかったのです。

この発掘ではいくつもの幸運に恵まれました。

第一に、地権者の川村さんは非常に理解のある方で、物心様々な形で発掘の援助をしてくださいました。「掘りたいところを掘っていい。」とまで言っていただき、最終的に全ての資料を寄贈してくださいました。

第二の幸運は、頭骨に右側の耳骨が残されていたことです。耳骨はクジラの分類に非常に重要な骨ですが、化石になるときに脱落してしまうことも多いのです。頭骨の周りを慎重に掘り進めていき、期待していた耳骨が見つかった時には、快哉の声があがりました。

三つ目の幸運は、クジラの肋骨にサメによる噛みあと「バイトマーク」が見つかったことです。生きている時か死んでからかは判らないものの、サメの歯の密度や分布状態から、クジラがサメのエサになったことはほぼ間違いなかったのですが、明確な物証が見つかったことになります。化石は軟らかい砂層に含まれていたために発掘やクリーニングが容易で、しかも保存状態も良好だったため、骨の表面についた傷がくっきりと残されていたのでした。

幸運はまだあります。クジラの頭骨の右端の 2 カ所には、ネギ畑を耕したトラクターのローターに削られた跡が残っていました。頭骨は、ぎりぎりのところで大破壊を免れたていたのです。

そして、平成25年12月19日の現地報道発表の後、幅 130cm のザトウクジラの頭骨を、数人がかりで掘り上げ、見つかったすべての骨を回収して博物館に運びました。博物館スタッフ、群馬県立自然史博物館や産総研など他機関の研究者、ボランティア、アルバイトなど大勢の人に発掘に関わっていただき、頭骨の取り上げは完了したのですが、その数日間には、冷たい雨、雷鳴、突風など、眠っていたクジラの怒りを買ってしまったかのような天候の急変もありました。

慎重にクリーニングし、復元したクジラの骨格やサメの歯の化石は、中央博本館で1回、地元柏市内で2回展示しました。この時には、平成2年に県立小金高校の生徒達によって印西市の木下層で発掘され、平成16年に博物館に寄贈されていた、別のザトウクジラ頭骨化石も展示しました。

このクジラ化石にも、貴重なエピソードがあります。当時、県立小金高校の教諭としてこの化石の発掘と研究に情熱を注がれ、当館に標本を寄贈してくださった三谷豊先生は、連絡をしたところ大変残念なことに急逝されていました。それでも、寄贈していただいた標本を今回はじめて展示するにあたって、何とかこの化石を発掘した小金高校の関係者に見てほしいという思いがありました。卒業生の個人情報保護という壁に当たりつつも、三谷先生の奥様と手を尽くした結果、ついに当時発掘に参加した卒業生にたどり着きました。そして何人かには展示を見に来ていただき、25 年ぶりに化石に再会してもらうことができました。

ネギ畑から偶然見つかったクジラの化石は、多くの幸運の賜物でしたが、この化石は、標本を中心とした人々のつながりを再認識させてくれました。これからも、資料とそれを取り巻く人々の努力が大事にされる博物館をめざしたいと思います。

取りあげる直前のザトウクジラ頭骨化石（平成25年12月）

（地学研究科）